

黒河中流域住民の自然認識の動態

シンジルト

はじめに

気候変動（地球温暖化）を含む環境問題への注目が高まる現在において、人為的な要素が重要な位置づけを占めている。ここでいう人為的な要素とは、産業革命以降の二酸化炭素の大量放出に限るものではなく、人間活動のあり方一般まで指す広義なものである。

いかなる人間集団も、身の周りの自然環境に対してある種の働きを行い、特定の生活様式を紡ぎだし、それを維持していかうとする。こうした傾向は該当集団の自然認識に反映される。おのずからあるものである「自然」と、その「自然」とのかかわりにおいて存在する人間自身に対する認識が自然認識だとすれば、その自然認識は、決して「静的」なものではない。むしろさまざまな要素が複雑に絡み合いながら、ひとつの社会文化現象として変化していく「動的」なもので

ある。こうした変化を促す重要な要素のひとつに国家の施政が挙げられる。

本章は、黒河の水をキーワードに人と自然との関係に焦点を当て、中流農耕地域住民の世代間に見られる自然認識の変化を辿ることを通じて、当該地域の近代史の一側面を描き出すことを目指す。本章で用いる基本データは、二〇〇四年八月から九月、二〇〇五年二月から三月にかけて、臨沢県の板橋鎮・板橋村、高台県の羅城郷・天城村、金塔県の鼎新鎮・双樹村において行った調査によるものである。

移民の意識

黒河全域総人口の絶対的多数を占めるのは、既述した三県を含む中流域農耕民であり、その圧倒的多数が漢族である。彼らが話す漢語（方言）に、トイレに行くことを意味する「解手」という語がある。解手は彼らが自らの地域の事柄に言及するコンテクストにおいてしばしば登場するキーワードの一つであった。

まず彼らは、自分が明朝時に山西省大槐樹からきた移民の末裔だと説明する。この地域に古代遺跡が多いのは、当時の將軍たちが戦勝で得た財宝を途中に埋め隠しておいて、故郷に帰るときに持ち帰ろうとしたもので、それが、彼らが戦死したため残されたものだと言う。そして、それらの移民の中に受刑者も大勢いたとされるため、自らのことを罪人の末裔という者もいる。「手

錠」という言葉で先祖を比喩する人もいる。長い間手錠を掛けられてきたため、背中に腕を組んで歩くことがこの土地の人の癖になっているともされる。

その上で、彼らは、自分たちがなぜ、トイレに行くことを「解手」というかを説明する。文字通りの解手の意味は、手を解き放すことだが、トイレに行くことを意味するに至ったのは、山西省から甘肅省に連行されてきた先祖たちをめぐる言い伝えと関係する。逃げ出さないように手錠をかけられていたため、先祖たちは用を足すときだけ両手を解放してもらえた。最初は「すみません、トイレに行きたいので、手を解き放してくださいませんか」と頼んでいたが、やがて頼まれる側も「手を解き放ってください」というだけでその意味を理解するようになった。さらには「解手」というだけでも通じるようになった。そして目的地に着いた後、「解手」という言葉が定着したという。

このことから、住民たちが先人の特殊な経験を自らの日常的な言語活動に投影させていることが考えられる。また、現在三県の基盤は、主に明朝以降、山西省の洪洞大槐樹に象徴されるような中国内地（中原）からの移民によって構成され、安定してきたとも考えられる。

手錠や罪人などの表現で自らの歴史を説明することに住民は特に戸惑いを見せない。被強制移民としての被害意識がないとは断言できない。しかし、中原政権が当時から一九九〇年代まで移民奨励政策を推進してきたことを考えると、彼らは移民の先駆者としての先祖に誇りを持つ可能性がある。いずれにせよ、当時の移民は単なる開墾だけではなく、目と鼻の先にあった遊牧民族

との争奪の中でオアシスを守ることも重要な仕事であった。従って、解手という言葉が生れた時期において彼らは、中原政権の被害者であったかもしれないが、その後の数世紀の生活においては、遊牧民族から農地を守るという目的においては中原政権と立場をひとつにしてきたといえよう。

農牧拮抗の地

黒河上流のチベット族やヨグル族牧畜地域、そして下流のモンゴル族牧畜地域をみてきた筆者は、中流農耕地域の「景観」のあり方に新鮮なものを多く感じた。内地並みの大型の都市や大規模な灌漑施設そして大量な人口など「社会景観」はもとより、地域の「自然景観」の一部ともなっている明長城や烽火台など遺跡の多さに驚きを感じた。

こうした遺跡に関して、三県の住民の間で何らかの知識を共有する。たとえば、臨沢県板橋郷には仙姑廟という寺院がある。漢の時代、將軍霍去病が、匈奴との戦いに負け、撤退したとき、黒河で浮き橋を見つけた。橋の上には、ある女性が手を振っていた。この橋のお陰で、漢軍は逃走できたが、匈奴軍が到着したときに橋は消えてしまった。この橋は後に現在の「板橋」の名の由来になったとの言い伝えがある。地域の人が、その女性を記念するために、廟を建てて、仙姑廟となった。後に匈奴は寺を燃やしたが、そのせいで匈奴の草原が蛇だらけになったため、匈

奴は廟を再建し、草原は回復したとされる（劉愛国、二〇〇三、四七―四九頁）。さらに、仙姑廟は明朝時に中原政權を脅かしていたオイラド・モンゴルの軍勢をも撤退させた神秘的な力を持つという物語もあった（張志純ほか、二〇〇二、三二―三三頁）。この廟は解放後、封建的な迷信とされ、一九五二年土地改革運動で破壊され、その建材で人民政府の建物が建てられた。一九八〇年代後、当の廟が復活し、モンゴル人も布施をしたという。

さらに、黒河という川の名称自体も、それは霍去病が匈奴との戦いに勝ったあとつけたという伝説があるようだ。ある日、城にいた霍去病は匈奴の大軍に包囲された。脱出の方法を考えている間に寝てしまったが、夢のなかで、黒い顔をした巨人と出会い、そこで秘策を授けてもらった。翌日、霍去病は部下とトンネルを掘り、脱出に成功した。その直後、彼は城外に流れる川の水をそのトンネルの中に注入した。他方、城下で数日も待った匈奴軍が、つい我慢できず城に突入したところ、漢軍が一人もいなく、だまされたことを知った。匈奴軍が入城したのを見て、霍去病は城門を閉めた。トンネルを見つけ、その入口を開けてしまった匈奴軍のほとんどが、逃げる場所もなく城内で溺死した。漢軍は勝利した。夢の中で出会った黒顔の恩人に恩返しするため、霍去病はその川に、「黒河」との名をつけたという（張志純ほか、二〇〇二、二六―二七頁）。

また、高台县天城村には正義峡という堰がある。昔、正義峡あたりは、険しい石の山々の中にあり、水がたくさんたまっていたため、「石海」という名を持っていた、つまり海だった。大禹治水のときに、正義峡一帯を刀で切り開いたので、たまっていた水が流出し、現在の地が現れた

という。そのため、天城村の近くの山に「禹王廟」という寺が建てられた。元來「正義」は、「鎮夷」であり、蛮族である夷を鎮めるという意味だったが、解放後現在の名に修正されたという。正義峡は、農耕と牧畜の境界線であったとされてきた。その上の流域は農耕で、下の流域は牧畜であった。農耕の拡大によつて、現在では下も農耕地域になっている。

正義峡を下れば、金塔県の鼎新鎮地域がすぐ目の前に現れる。今、鼎新鎮地域は「毛目」と俗称されているが、一九二八年まで「毛目」は当該地域の正式な行政名（毛目県）であった。外部から「毛目」と呼ばれ、そのように自称もしている鼎新の住民たちは、毛目の意味をほとんど知らない。聞かれたら、昔は匈奴（つまりモンゴル人）の地だったから、そう呼ばれるようになったのではないかという。

上記のような経緯で形成された中流農耕地域はやがて、「鳥流しの地」から「穀倉」に変化していく。甘肅省東部中部の乾燥地区から移民を多く受け入れてきた。とりわけ一九八〇年代、被災民を多く受け入れた。二〇〇〇五年筆者が調査していた時、臨沢県・鴨暖郷には、五四世帯の移民村があり、乾燥した土地でたんぼを切り開いて、ポンプで地下水をくみ上げて農耕を営んでいた。

社火の変化

中流地域と内地とのつながりは、住民たちが実践している芸能の側面にも現れている。最も広く伝わっている地域の伝統的な芸能といわれるものに、「社火」がある。

社火は、もともと土地の神そして龍に対する崇拜を表すため生まれた儀礼である。社劇ともいう。語源的に、「賑やか」の意味からきたといわれる。用水路を管理する農官が組織する六八人編成のチームが演出する。顔の隈取や衣装からその役目を観客が知るが、メンバーはひたすら無声で、踊りを披露する。賑やかに踊っている間に、農官が観客に挨拶する。同時に、膏薬匠というおしゃべりの人が登場し、会場を守ったり、進行を指揮したりする。

毎年、初めて土地に鋤スキを入れるとき、鋤の入ったところに、一種の紙銭を捧げ、その土地の神や山の神様を喜ばせる。時期的には旧暦の啓蟄である。この時、社火などの儀礼的な踊りも披露される。そして社火を行う初日は、龍王廟、土地廟、山神廟に行つて、紙銭そして饅頭や桃など食べ物を捧げて、挨拶するのが正しい手順だとされる。

文化大革命（以下、文革）を経て、こころした決まりが徐々になくなり、特に決まった時間がなくおおよそ旧正月五日から一五日の間に行われるようになってきたそうである。また、目的として神や龍を喜ばせるためではなく、金儲けのための社火も現れ、家を新築した農家の庭の中や企業工場の前で踊るなど時には報酬がらみの問題で、トラブルも生じているといわれる。

迷信の排除

他方、社火以外の地域の慣習として旧正月前後に、殺生をめぐる制限もあるようだ。例えば、旧暦一二月三日から一月一五日までは木の伐採を含むすべての殺生は禁止されており、それは、神々が人間界に来て旧正月を過ごす期間中だからという。この期間を除けば、猟に関する制限は特になく、また、猟の対象もその年齢や種類にとらわれないようだ。そのため、人々はしばしば「狐の肉以外は、食べてはいけないものはなく、食べないのは、宗教団体に入っている人だけだ」と言う。殺生に関して、筆者は高台県で、彼らに近いヨゴル族地域の慣習にみられる季節的な制限や緑樹と幼い動物などをめぐるタブーの存在について話をしたことがあった。そこで、天城村の元書記長は次のように感想を述べた。

我々が内モンゴルに行ったら、なぜ嫌がられるかというのと、我々は、乾いた木にしても、湿った木にしても、関係なく伐採していたからである。いまはほとんどなくなったが、昔（一九七〇年代末まで）は内モンゴルに行つて（砂漠に自生する灌木の一種である）校校も伐採していた。とにかく、我々のところでは、迷信を信じる者は少ない。

彼は、少数民族地域の内モンゴルでの経験を持ち出した。彼の話は、「少数民族の慣習は迷信

であり、自分たちのはそうではない。我々がそういった認識を持つため、少数民族に嫌われた」と纏められよう。野生の動植物に対してだけでなく、中流域では、川の水をめぐるタブーといったものがほとんど見当たらず、黒河を人格化したりするような伝説も聞かなかった。

他方、昔は、新年初めて井戸水を使うときには、揚げ菓子などを井戸の中に入れ、井戸の神様を祀るようなしきたりがあったようだ。また、毎年初めてたんぼに水をやるときに、用水路の源で紙銭を燃やしたりして、水路を祀っていたという。ただし、このしきたりは、解放以降とりわけ文革以降は封建的な迷信だとされ、基本的になくなったと言われる。

このように、獣・野生樹木・河川水と同じく「迷信」とされてきたものの、井戸水や用水路などに対する一定のこだわり（禁忌視する態度）は過去においてあったことが確認できる。もし後者の用水路や井戸水といった人工物を、彼らにとつての「近い自然」領域とみなすことが可能であれば、類似するこだわりはほかにもあったそうだ。例えば、石臼を汚してはならず、寺院（の遺跡）に勝手に触れてはいけないという。これらを犯したら、災いを呼び、足が痛くなったり、ホコリが目に入ったりして、簡単には治らなかつたと言う。その場合めかんなぎ（巫）に頼んで、厄払いをしてもらっていた。場合によつて、病因があるとして家具や服などを燃やすようにめかんなぎに指示されていたそうである。

こうしたこだわりは、六〇代以上の年齢層には伝わっているようにみられるが、文革を経験した彼らも、めかんなぎを公に認めることに慎重であった。こうした年配世代とは異なり、文革前

後に生まれた若い世代の多くは、めかんなぎのことをはつきりと「迷信」の領域に分類し、「巫婆」と蔑称する傾向がある。

自然の領有

解放まで天城村には仏教と道教の寺廟が多く、城内面積の三割が寺院に占められていて、そのほとんどが明の時代に建築されたものであった。その中でも、仏教系列の普濟寺、香山寺、道教系列の玄帝廟、城皇廟などが有名である。解放後の一九五〇年代から文革にかけて、その多くが破壊された。普濟寺も城皇廟も一九五〇年に取り壊された。これら以外のたとえば関帝廟、文昌宮、馬王廟なども取り壊された。そして、文革時には、文物の破壊がエスカレートした。一九五〇年代にほとんど取り壊された寺廟から流出した文物も徹底的に焼かれた。当時のスローガン「破四旧」の破壊対象は有形のものに限らなかつた。民謡も、社火も、宗教信仰も迷信だとされ、禁止、破壊の対象だつた。

破壊された寺院の木材は、建材として県を中心地の建築に使われた。城壁もわずかにしか残っていない。破壊された建築物の廃墟の土を自分の畑に運んでいる若い世代の村民を、筆者も見ることがある。説明によると、これらの古い建築物のなかに長年蓄積した栄養質が耕地の肥料として最適であると考えられているようだつた。

では、もとより、こだわりの対象にはほとんど登場しない野生樹木など「遠い自然」領域が、文革やその後の時代に、どのような扱いを受けていたのか。中流域では、「胡楊」(ポプラ)という名で広く知られる野生樹木を、「胡桐」と表現する。高台县の人々の話によると、正義峽あたりに胡桐がたくさんあった(約二〇〇〜三〇〇畝)²⁾。一九六九年、天城村(当時は「大隊」)の長が村民を組織して、それらをほとんど切り倒し、小麦などの耕地にした。そして一九七〇年代に入り、桃、梨、林檎など果樹が植えられたため、桃源郷とも言われていた。一九九〇年代は果樹も切り倒し再び耕地にした。そして現在は綿を植えているという。この他、天城村は近年(一九九〇年代末)、さらに百畝くらいの荒地を開墾した。そこにあった天然の赤柳を倒して燃料にしたという。人間の活動範囲は、それらが所属する行政地域にとどまらず、さらに省の境界線を越えて、物理的に遠い「遠い自然」領域へと、その影響を及ぼしていったようである。中流の三県ともにそうだが、村を囲む山のほとんどが禿山で、夏でもそうであった。降雨量が少ないというのが理由のひとつだという。

昔から燃料がすくない天城村の人々は、薪を取るため馬車を使って、内モンゴル自治区領内のバダンジン砂漠の奥地に入っていた。そのころのバダンジン砂漠には、梭梭が多かった。ほかの木より硬くて大きいため、燃料として最適と判断されたようだった。当時、支援策として大隊は、牛車や馬車を配備していた。家族の規模によって、配備する回数も異なっていた。大家族は小家族より配備してもらった回数も増えていた。一般には五〜六人で行動する。また、経験者の記憶

によると、砂漠の中には野生の羊が多かった。当時、大量に捕殺したため、今になっては、ほぼ絶滅したとされる。

これは前項に登場した元書記長の語り、「我々が内モンゴルに行ったら、なぜ嫌がられるかという、……我々のところでは、迷信を信じる者は少ない」にも反映されていた。

以上述べてきたように、一九五〇年代から一九九〇年までのいわゆる「政治第一」や「経済第一」のイデオロギーに支配された時期における自然環境の変化は、「人為」によるところが大きい。野生の動植物や河川など「遠い自然」にまつわる禁忌はほとんどみられず、「迷信」と一蹴されてきた。それに比較して、用水路・井戸・寺院・石臼など「近い自然」に対するこだわりはある程度みられた。

だが、若い世代は、それも「迷信」と捉える傾向をみせた。政治第一の時代に生まれ、経済第一の時代を経験する彼らは、先人が内地から持ち込んだこだわりを「迷信」とする以上、少数民族の慣習についても例外ではない。

歴代の政治運動やイデオロギー教育宣伝によって幾重にも強化されてきた「迷信の排除」という社会実践がもたらしたのは「人為の崇拜」とでも言うべき社会事実である。

水分配のルール

水不足による黒河下流域の砂漠拡大や黄砂の発生などに代表される環境問題を解決するため、国家によって推進される黒河の水を配分する「分水事業」(黒河水量調度)が二〇〇〇年から始まった。この事業を、中流域の立場から言うと、これまで農業のために黒河から汲み上げていた水量を減らし、それを下流域に流すということになる。

金塔県の鼎新鎮・双樹村に王大爷という獵師がいた。彼は、野生の羊から狐やウサギまで、殺さないものはなかった。解放後、狼退治キャンペーンにも貢献したことで有名人になった。同じ村には、王三爷という人もいた。彼は、在家修行者で、獵などを一切しない者だった。しかし、王大爷は八九歳と長寿だった。それに対して、王三爷は五九歳で亡くなり短命だった。対照的な二人の人生をアイロニカルに「本来なら命を奪った罪ある人間が先に死ぬはずなのに、実際はそうではない」と語る人々が多い。

因果応報説を安易に信じれば、王三爷のようになってしまうかもしれない。それより王大爷に学び、現世を大事にするのがよい。つまり、仏教などの宗教を単なる「迷信」として位置付ける意味も含まれている。

現地においては今、殺生と修行のどれも行われていないようだ。国家の銃規制法や野生動物の激減などのため殺生は物理的に不可能になっている。他方、「人為の崇拜」によって、宗教信仰は「迷

信」の領域に追いやられており、修行もほとんど現実的ではない。

その代わりに、「人は天に打ち勝つ」との言葉を残した毛沢東を信じる若い世代は多いようだ。例えば、双樹村のA氏（四二歳）は言う。

昔二月二日龍台頭の日に散髪する慣習があった。最近はみなに無視されている。忙しいため、社火も最近あまりしないし、四月八日の庙会もいかない人もいる。今の人は、むしろ毛主席のいう「不設社、不叩頭、不敬神」を信じている。

信仰や修行と無関係に、生計を立てることは、こうした若い世代にとっても無説重要である。黒河によって成り立っている灌漑農業を生計の基盤とする彼らにとって、河川水は重要な資源である。その貴重性を一層実感するようになったのは近年のことである。

二〇〇〇年、当時の首相朱鎔基の後押しで「黒河流域管理局」という専門機関が設立され、「黒河主流調度管理暫定方法」という実質上法的な規制力のある規定も通過することで、分水事業が正式にスタートした。当年、黒河最下流地域の内モンゴル自治区エゼネ旗に六・五億立方メートルの河川水が分配され、数十年振りに黒河の水を見た下流域のモンゴル人たちは大喜びしたとされる（李丹、二〇〇一）。

他方、このことは中流三県の用水量の減少と水費の値上げを意味する。三県の中で最もエゼネ

に近い金塔県鼎新鎮の住人の感想はより切実である。B氏(男、三九歳)はいう。

八月一日から翌年の一月まではエゼネのもので、一月から七月三十一日までは金塔のものだ。エゼネには水が多いけど、我々には不足している。いくら不足しても、黒河の水は使わせてもらえない。酷すぎる。すべてが、兄弟民族のものになってしまふのだ。黒河の水に頼っている人間の数は、張掖・臨沢・高台そして我々のほうが、圧倒的に多いのに。なぜ、七月以降は、兄弟民族の牧草のためだけに使われてしまふのか。

彼の説明によると、綿などの収穫時期は一〇月で、八月以降の水需要も大きいという。彼にとつて、いま水が不足しているのは、水が管理されたため、つまり黒河の水が兄弟民族のものになってしまったからというわけである。彼のような認識を持つ人は多かった。彼らにとって、二〇〇〇年の分水事業に伴う黒河の河川水使用のルールはそれまでの「水規」と呼ばれるものとはかなり異なつたようだ。

「水規」とは、清から残されてきた制度であつた。歴史記録によれば、清時、黒河中流域(現在の臨沢県、天城を除く高台县南部地域)の過剰利用によつて下流域(現在の天城や鼎新一帯)に季節的な水不足問題をもたらした。一七二四年に陝甘総督年羹堯が「黒河均水制度」を頒布し、「芒種前の一〇日間上流域は黒河からの取水をストップし、河川水を完全に下流に送り込むこと。

この制度を永久に守ること」と規定した（高台县誌編纂委員会弁公室・政協高台县教文衛体工作委員会、一九九一、一四八頁、高台县誌編纂委員会、一九九三、五九四頁）。

後の歴史の中で行政区画の変更などに伴い、その内容にも変化があったものの、制度自体は民間では「水規」といわれ、二〇〇〇年「分水事業」が登場するまで、一種の慣習法として機能してきたと考えられる。しかし、この「水規」は、最初から黒河の最下流に位置する牧畜地域（現在の内モンゴル自治区エゼネ旗）を想定していたものではなく、現在の臨沢・高台・金塔県など農耕社会内部の水トラブルを防止するためのものだった。

従って、彼らにとつて黒河の水使用に関するこの二つのルールには大きな隔たりがあり、問題なのは二一世紀の方だ。なぜなら、人間が直接食べる麦あるいは換金作物である綿と動物たちが食う草とを比較してみるとどちらが大事なかは一目瞭然ではないかという彼らの認識があるからだ。彼らにとつて、麦や綿など身近な存在に比べ、動物や牧草は遠い二次的存在となる。有用価値の低いものを生産資料にし、かつ人口の少ない兄弟民族のために黒河の水を流すことは理解に苦しむものだった。これに比して、一八世紀の水規の方が理解しやすかった。少なくともそれは麦や綿などのために規定されたからである。

耕地の増加

近年旱魃に加えて、分水事業の登場のため、水費が高く、大変だというのが多数の意見である。多くの人、とりわけ年寄りたちはいう。「昔は良かったが、現在はだめになった」。臨沢県板橋村の元書記長（男、七五歳）はその理由について、このように言う。

解放以前、この用水路の数は少なく規模も小さかった。また用水路の水の量もせいぜい今の三分の一程度だった。作物も小麦くらいしかなく、稲やトウモロコシといった水を大量に飲み込む作物は一九五八年から現れた。食糧増産のため、荒地を大量に開墾した。結局、荒地を開墾しすぎたため、今は水不足になっている。

また、板橋村の隣村のある八〇代の老人はいう。

昔黒河が深く、広がったため、溺死事件が頻発していた。しかし、今は浅く狭くなった。橋の上に立ってみても、川の水が見えないくらい。これは、荒地開発によるものだ。現在の耕地が増えすぎて、水が少なくなった。

さらに、近年の天災と水不足の関係と結びつきながら天城村の老人C氏（男、七一歳）は言った。

昔は旱魃があっても、黒河があるからたいした被害も受けずにすんでいた。二〇〇一年に旱魃があり、八月まで四カ月黒河の水は断流した。過去においてはこのようなことはありえなかった。耕地が少なかったからだ。

その上でC氏は、我々現在の農民、特に若者たちは、生活慣習や考え方などにおいては、「すべて都市の人のまねをしているのだ」という。彼の若い頃より、今は合理的で、利益追求の人間が増えているというニュアンスである。

若い世代の人間に言及されている「分水事業」と「兄弟民族」との関係について、年配世代の人々も無関心ではなかった。だが捉え方は、必ずしも一様でない。高台県天城村の候継周氏（男、六七歳）は「黒河母親」との題では次のような意味の短詩を書いた（候継周、二〇〇二）。

甘粛と内モンゴルをつなぐ黒河は、モンゴル人にも漢人にも母のようにみなされてきた。過去母の負荷は小さかったが、現在は重荷を背負っている。慈母の母乳が少ないからではなく、むしろ子供たちの思いやりが欠如しているからだ。自然にもその道理があるうが、人為的な要素こそ根本である。中共中央は黒河を総合的に管理する決断を下した。分水や節水に努力

することで、母親の元気な姿を取り戻そう。

この短詩にはいくつか注目すべきポイントが含まれている。漢族とモンゴル族の関係問題、耕地拡大などの人為による黒河の水不足の問題を視野に入れてること、かつ全体的な姿勢が自己批判的であることをあわせて考えると、年配世代と前述した若い世代との、分水事業をめぐる認識や解釈の違いは、より明確になっている。

おわりに

黒河中流オアシス地域の主は漢族農耕民であった。彼らの文化的アイデンティティに二つの特徴がみられた。一つは、遙遠な彼方の内地（山西省）との絆の強調である。それはたとえ強制されたにせよ内地からの移住民という自認に現れる。一つは、身の回りの「自然」そして「夷」との戦いの強調である。それはたとえ無意識にせよ地名の由来をめぐる説明に現れる。上記の特徴は、中流域が黒河流域生態系の他の部分（上流と下流の牧畜地域）との融合を回避することで、成り立っている。結果、乾燥地域農業が今日まで貫かれてきた。

無論、中流域の農業を必要としてきたのは、住民の文化的アイデンティティだけではなかった。彼らは、経済や国防上の国家建設を目指す中原政権の後押しによって、その生業は肯定され一層

盛りえた。とりわけ一九五〇年代以降、食糧基地として国家への貢献度が高まった。だが、それによって中流域による黒河流域生態系全体への影響度も高まった。同時に、「迷信の排除」など時のイデオロギーの浸透によって、中流地域社会においても、伝統文化、とりわけ自然界との接し方に、世代間の差異がみられた。

一九九〇年代後半以降、国家は自然保護目的で黒河分水事業の実施に乗り出した。世代を問わず、中流域の住民たちは共通に分水事業に賛成を表明する。しかし「自然保護」は、少なくとも黒河中流域いずれの世代にとっても、初耳のスローガンであった。そこで、事業による「水不足」問題が生じ、問題をめぐる住民の説明には世代間の差異が見られた。若い世代はその理由を外部に、年配世代はむしろ内部に求めた。地域住民は、「水不足」という大きな「不利益」を被るのが自分となった場合、その故を考え、自分たちに納得できるような説明を下さなければいけない。その際、頼りになるのは自前の論理しかない。彼らは自ら生まれ育った時代や社会環境で得た論理を容易に否定できないからである。異なる時代背景の下で形成された異なる論理に従い生まれる説明は異なるが、それぞれの内部においては整合性を持つ。それがゆえ、黒河中流域で生じた「水不足」という一つの事象をめぐる住民の説明は、その世代の違いによって異なっていたことも、ロジックとしては矛盾しない。

「分水事業」に対する賛成表明と「自然保護」に対する理解とが、必ずしも直結しないことを、「水不足」をめぐる黒河中流域住民の複雑な認識から窺うことができよう。このことを通じて、我々

はさらに、彼らの認識形成に深く寄与してきた国家施政のアンビバレンスも同時に確認することができよう。

注

(1) 旧思想・旧文化・旧風俗・旧習慣を打破せよというスローガン・運動のことである。
(2) 一畝は約六・六六七アールに相当する。

(3) 地方自治体行政府の組織そして奨励のもとで、一九五〇年金塔県は大小狼を一二七匹消滅したことにより、県内の狼は基本的に絶滅したといわれている(張文質ほか、一九九三)。

引用文献

高台县誌編纂委員会弁公室・政協高台县教文衛体工作委員会(翻印)、一九九一、「新纂高台县誌」

高台县誌編纂委員会、一九九三、「高台县誌」蘭州大学出版社

候繼周、二〇〇二、「黒河母親」(「甘泉」第三十四期、八二頁)

李丹、二〇〇一、「黒河実現省際分水」(「人民日報海外版」一月四日第五面)

劉愛国、二〇〇三、「臨沢民間伝説故事」天馬圖書有限公司

張文質・王成相・成發昌、一九九三、「旧社会的狼患見聞」(政協甘肅省金塔県文史資料委員会「金塔文史資料 第二輯」)

料 第二輯)

張志純・何成才・安培蘭、二〇〇二、「張掖民間伝説故事」甘肅文化出版社

第二部 人々の戦後史

〔付記〕

本稿は、中尾正義教授が率いる「オアシスプロジェクト」に参加してきた筆者の調査研究結果の一部である。現地調査にあたり、臨沢県の王新武さん、高台県の候継周さん、金塔県の丁成章さんをはじめとする多くの方のお世話になった。記して深謝する。

中国辺境地域の50年

黒河流域の人びとから見た現代史

中国辺境地域の50年

黒河流域の人びとから見た現代史



中尾正義

フフバートル 編

小長谷有紀

中尾正義

フフバートル

小長谷有紀

編

変貌する黒河流域のオアシス都市と人びとの暮らし

中華人民共和国成立以降の「大躍進」「文化大革命」「改革開放」「西部大開発」などの政策により、黒河流域における人々の生活は、大きく揺らぎ変化している。本書の第1部では、科学的調査にもとづいた、黒河流域の自然環境の変化を概観し、さらに第2部では、現地での聞き取りにより明らかになった人びとのライフヒストリーという面から、黒河流域における50年の歴史を照射する。

激変する中国辺境の環境と人々の生活の調査記録

東方書店 定価 (2400円+税)



9784497207067

ISBN978-4-497-20706-7
C3022 ¥2400E



1923022024009

定価（本体 2400 円＋税）

東方書店



そもそも現在の中国西部は、歴代の中華王朝にとつては辺境の地であった。異質な人々が住まう地、あるいは異質な人々との接点となる地であったといつてもあつた。確かに中華王朝にとつてはついであつたかもしれない。だからこそ、数々の戦乱を経験してきている地ではある。そこに暮らす人々にとつて、心穏やかな日々はかりではなかつたであらう。しかし考えてみれば、それはその地に暮らす人々のせいではなかつた。彼らはさまざまな政策や外交関係の軋轢の中で、いわば翻弄されてきたのだと言ひ換えられるかもしれない。最近五〇年の歴史の中でも、さまざまな政策の転換や国際関係の軋轢の中にさうされてきた。そしてその中で、なんとか、あるいはしどろく生き延びてきた人たちが暮らしている。その人たちの生き様を何とか考えたい、というのが本書の意図である。（「まえがき」より）

